

## 青柳いづみこ(ピアノ) & 高橋悠治(ピアノ)

### 曲目解説

#### イベール:物語

パリ生まれの作曲家ジャック・イベールは、パリ音楽院では「フランス 6 人組」のミヨーやオネゲルと同窓で、フランス風の軽妙洒脱な作風で知られる。1919 年にローマ大賞を受賞後、23 年までローマに留学した。その時期に書かれた《物語》は、不思議な異国情緒を湛えた 10 の小品からなり、1922 年に出版された。連作ではなく、それぞれに独立した内容を持ち、様々な異国の香りが聴き手のイメージを刺激する。

#### シュミット:眠りの精の一週間

フランスの作曲家フローラン・シュミットは、パリ音楽院でマスネやフォーレに学び、ピアニストとしても活動した。作曲家としては、ピアノ曲は意外と少なく、管弦楽からバレエ音楽に至る幅広い作品を残した。

本曲は 1912 年のピアノ連弾作品で、アンデルセンの童話『眠りの精オーレおじさん』に想を得ている。オーレおじさんが毎夜、少年の枕元に現れてお話を聞かせてくれ、少年がその夢を見る。全 7 曲なのは、それが一週間続くからである(ただし、曜日の順番は作曲者によって入れ替えられている)。

#### ラヴェル:マ・メール・ロワ

「マザー・グース」という名称は、フランスの作家シャルル・ペローの童話集の口絵にあった文言「マ・メール・ロワ」が英訳されたもの。それがのちにイギリスの伝承童謡の通称として用いられるようになった。

5 つの小品からなるモーリス・ラヴェルのピアノ連弾作品《マ・メール・ロワ》は、友人の子どもたちのために 1908~10 年にかけて作曲された。「マザー・グース」をもとにしており、ラヴェルならではのシンプルな旋律の美しさを感じられる。初演は(子どもが演奏するには少々難しすぎたため)、ピアニストのマルグリット・ロンの弟子たちによって行なわれた。

#### ミヨー:ボヴァリー夫人のアルバム

19 世紀フランスの作家ギュスターヴ・フローベールの長編小説『ボヴァリー夫人』は、若い女主人公エマ・ボヴァリーが、田舎の町医者に嫁ぐものの、華やかな世界を垣間見たせいで凡庸な結婚生活に嫌気がさし、不倫や借金を重ねたあげくに追い詰められて、服毒自殺をはかるという内容。自由間接話法を用いた心理描写や、精緻に彫琢された文体により、19 世紀フランス文学の傑作と評されている。

フランス 6 人組の一人ダリウス・ミヨーは 1933 年、『ボヴァリー夫人』の映画化に際して音楽を担当した。そして、映画音楽のシーンから自由に抜粋してピアノ独奏曲としたのが、全 17 曲からなる《ボヴァリー夫人のアルバム》である。その後、ミヨーの妻マドレーヌがフローベールの小説から朗読用にテキストを抜粋し、同アルバムに添えたバージョンを作った。本日は、高橋悠治が訳したテキストを青柳いづみこが朗読する。